

◆2021年12月第3週の礼拝説教（クリスマス礼拝）

■日時：2021年12月19日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「あなたがたのために救い主がお生まれになった」

■聖書：新約ルカによる福音書2：8-20（p103）

■讃美歌：264「きよしこの夜」・261「もろびとこぞりて」

お早うございます。

クリスマス礼拝の時を迎えました。

皆さんは、昨年度のことを覚えていらっしゃいますか？

昨年クリスマス礼拝は12月20（日）で、この時を最後として立川教会はオンラインによる礼拝に切り替わります。それから今年の9月末までの9ヶ月間、繰り返される緊急事態宣言の下、全ての集まりは中止となりました。中高生対象のジュニア礼拝と夕礼拝だけは、集まる人数が少ないので続けることが出来ましたが、今こうして再び皆集まってクリスマスを祝うことが出来るのは、感慨深いものがあります。

ところで、改めて、私たちはなぜクリスマスを祝うのかを考えてみたいと思います。

クリスマスとは、私にとって、そして私たちにとって何であるのかと言うことです。

今読んでいただいたように、遠い2000年の昔、ユダヤの鄙びた村、ベツレヘムで、一人の男の子が誕生しました。

しかし、この誕生は、普通のどこにでも起こる誕生ではありませんでした。

イエス様の一生を記した箇所は、聖書の中でも福音書と呼ばれ、聖書には4つの福音書が記されています。その中で、イエス様の誕生の場面を記しているのは、マタイによる福音書とルカによる福音書で、マルコとヨハネの福音書にその場面はありません。又、同じイエス様の誕生の場面でも、マタイとルカの記述は違っています。誕生の場面を記述する際に、マタイが元にした資料と、ルカが元にした資料とは異なっているからです。

但し問題は、誕生の場面が違っていることではなく、福音書記者ルカは、自分が書いたイエス様の誕生の場面によって、読む人に何を伝えたかったのかと言うことです。同じく、福音書記者マタイは、何を伝えたかったかと言うことです。

イエス様の誕生前後の様子を最も詳しく記しているのはルカです。

そして、ルカが福音書を記して行く際の視点は、一貫して変わることはありません。

例えば 101 頁上の段にあるイエス様の母マリアの賛歌です。お開き下さい、新共同訳聖書 101 頁です。

【ルカによる福音書 1 : 46-55、p101】

46 : そこで、マリアは言った。

47 : 「わたしの魂は主をあがめ、

わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

48 : 身分の低い、この主のはしためにも

目を留めてくださったからです。

今から後、いつの世の人も

わたしを幸いな者と言うでしょう。

49 : 力ある方が、

わたしに偉大なことをなさいましたから。

その御名は尊く、

50 : その憐みは代々に限りなく、

主を畏れる者に及びます。

51 : 主はその腕で力を振るい、

思い上がる者を打ち散らし、

52：権力ある者をその座から引き降ろし、

身分の低い者を高く上げ、

53：飢えた人を良い物で満たし、

富める者を空腹のまま追い返されます。

54：その僕イスラエルを受け入れて、

憐れみをお忘れになりません。

55：わたしたちの先祖におっしゃったとおり、

アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」

このマリアの賛歌で、はっきりルカの視点が示されるのは、48節、

48：身分の低い、この主のはしためにも

目を留めてくださった。

そして、51節から53節です。

51：主はその腕で力を振るい、

思い上がる者を打ち散らし、

52：権力ある者をその座から引き降ろし、

身分の低い者を高く上げ、

53：飢えた人を良い物で満たし、

富める者を空腹のまま追い返されます。

さらに、102 頁下の段、2 章 6-7 節です。

【ルカによる福音書 2 : 6-7、p102】

6 : ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、

7 : 初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

マリアにとって、初めての出産の場所が、動物たちが飼われている家畜小屋でした。生まれたばかりのイエス様が寝かされたのは、動物たちが餌を食べる飼い葉桶でした。これ以上の貧しさはあるでしょうか。ルカは、イエス様の貧しさの極みでの誕生を記しています。

今日与えられた聖書の御言葉も同じで、ルカが福音書を書いて行く視点は、抑圧された者、貧しい者、虐げられ、周辺に追いやられた者の側に身を置いているのです。

イエス様の誕生の知らせは、真っ先に羊飼いたちに知らされました。

2 章 8 節にあるように、羊飼いたちは、羊の番をするために、夜眠る事も、家の中で休むことも許されず、夜通し、野宿をして過ごさなければなりませんでした。羊飼い、彼らは、ユダヤの社会では、貧しく、虐げられ、周辺に追いやられた者たちでした。即ち、ユダヤの民の中で、最も小さくされた者たちでした。言うなれば、あの壮大なエルサレム神殿の権威と権力を手中に収める祭司長、律法学者、ファリサイ派の人々とは対極に置かれた、弱く、蔑まれた、取るに足りないと思われた人々でした。

それではなぜ、救い主誕生の知らせが、あの権力の座に座る人々ではなく、羊飼いのような、小さな、社会の隅に追いやられた人々に真っ先に伝えられたのでしょうか。ルカは、このことを記すことによって、私たちに何を伝えようとしたのでしょうか？

皆さんは、心の奥底から突き抜ける喜びを経験されたことがあるでしょうか。

誰にでも、人生に必ず一度はあると思います。

ただ、その喜びが、自分のことでなく、自分以外の他者に起きたことでの経験はあるでしょうか。

私は、一度だけあります。

家族の一員である長男に起きたことです。

彼の大学受験の際の出来事でしたが、現役では合格出来ず、一浪しての翌年の受験の時のことでした。

最初は、不合格が続きました。

毎回、合格発表の時間になっても彼からメールが来ないのです。

「駄目だったのか」との思いが続きました。そして何回目かの発表の日、「又、ダメかな」と思ったその時、メールが届きました。合格の知らせでした。

あの時の喜びを忘れることは出来ません。一浪時代、どれだけ彼が必死になって勉強していたかを知っていたからです。その努力が報われたことの喜びは、何物にも代え難いものでした。

ところで、お話ししたいのは、その次のことです。

自分の身体の奥底から突き抜けるような喜びは、誰か他の人とも分かち合いたいのです。

私は、信頼していた同僚の一人に、そっと知らせました。知らせずにはられませんでした。喜びを分かち合いたかったからです。その同僚も、「凄い！」と言って、心から喜んでくれました。

私は、救い主誕生の知らせは、ユダヤの社会の中で、その知らせを最も喜べる者たち、待ち望み、身体の奥底から突き抜けるような喜びを覚え、そして、その喜びを人々と分かち合える者たちに真っ先に届けられたと思うのです。それが、社会の周辺に追いやられていた羊飼いたちでした。

しかし、社会の周辺に追いやられていた、ただそれだけを理由として、真っ先に救い主誕生の知らせが羊飼いたちに伝えられたわけではありません。

当時、厳格に律法を守ってこそ、神様から義しい者とされ、律法を守ることをお互いに競い合うようなユダヤの社会で、安息日すら守れない羊飼いたちが生きていける居場所はあ

りませんでした。羊飼いたちにとって、律法とは、罪の自覚を生じさせる物であり、それは自らへの絶望を深めるものですらあったのです。

羊飼いたちの心の奥底に宿っていた罪の意識を思います。自分たちは、律法を守ることが出来ない憐れな者、神様から見捨てられた者であるとの思いです。

そのことが、日々の生活を過ごす上で、どれだけ辛い、惨めなことであったかを思います。罪を悔い改め、犠牲の供え物を捧げようにも、最小の供え物を買うお金すらない現実のただ中で、それでも必死に生を繋いで生きなければなりません。

ところが、その羊飼いたちに、即ち、神様の義から最も遠くにいとされていた自分たちに、真っ先に救い主の誕生が知らされます。彼らは恐れしました。非常なる恐れに彼らは襲われます。律法を守ることの出来ない自分たちへの神様の裁きが始まったと思えたのかも知れません。

その羊飼いたちに天使が告げるのです。

「恐れるな」と。

「民全体に与えられる大きな喜びを告げる」と。

羊飼いたちの恐れと驚きは、やがて感謝へと変えられます。

彼らに救い主誕生の知らせを告げ知らせた天使に、天の大群が加わり、神を賛美し始めたのです。

「いと高きところには栄光、神にあれ、

地には平和、御心に適う人にあれ。」

羊飼いたちの恐れは消え去りました。そして、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださいましたその出来事を見ようではないか」との勇気が与えられたのです。

己の罪への自覚が深ければ深いほど、罪赦されることの喜びは大きく、感謝も又大きいのです。マリアが歌ったように、「(神様の) 憐みは代々に限りなく、主を畏れる者に及び、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし」て下さいます。

今日、この日、私たちは、救い主の誕生を、心から喜びたいと思います。

己の罪を思う時、イエス様の十字架無くして、この罪が赦されることはなかったのですから。主イエス・キリストの十字架によって、この私の、私たちの罪が贖われ、神の国に招き入れられる者となったのですから。

クリスマス、それは、神様から、イエス様と言う尊い贈り物が、私たちに与えられた日です。イエス様の十字架によって、この私の、私たちの罪が贖われ、神の国に招き入れられる者となったのですから。

祈りましょう。